

医療事故の舞台裏

— 25 のケースから学ぶ日常診療の心得

長野展久(著)

〈評者〉名古屋大学医学部附属病院 副病院長／医療の質・安全管理部 教授 長尾能雅

医療事故とはどういうものか、100人の医師に問えば100の答えが返ってくる。何が過誤で、何が合併症か、事故調査はどうあるべきか、司法は、賠償は、と議論は尽きない。しかし、多くの医師は医療事故を断片的、一方向的にしか知る立場になく、その全体像を多角的に説明できる者は少ない。

本書にはきわめてリアリティに富む25の医療事故のエピソードと、その顛末が記されている。いずれのエピソードも、医療者、患者、司法、そして社会の思考回路を誇張なく伝えるものであり、日々医療事故と向き合っている医療安全管理者からすれば、これこそが医療事故の実態とうなずける。著者は誰に肩入れすることなく、可能な限りの中立性と自制を保ちながら、粛々と事故事実と再発防止策を綴っている。

著者の長野展久氏は脳神経外科医として研鑽を積んだ現役医師であると同時に、損害保険会社の顧問医として多くの医療事故をジャッジしてきた経歴をもつ。著者ならではの視点から指摘される医療現場の課題は興味深い。たとえば著者は、医療者がストレスのピーク時や、思い通りにならない症例を抱えた時に感じる「陰性感情」に注目し、警鐘を鳴らしている。陰性感情をもった医療者は、いつしか患者に“ブシコ”、“アル中”、“心因性”、“クレーマー”、“モンスター”、“コンビニ受診”といったレッテルを貼

り、解決を図ろうとする。これはやがて周囲に伝播し、チーム全体の判断能力を変化させてしまう。医療事故調査会などでは指摘されにくい、しかし誰にも覚えのあるリアルな紛争要因である。

また、本書の最大の功績は、事故症例を丁寧に記述することで、他に類例を見ない優れた臨床指南書を完成させた点にある。再発防止についても、いたずらにシステムに偏重するのではなく、医療者が事故に学び、自身の臨床行動や思考パターンを謙虚に見直すことを第一に説いている。通常紛争情報はクロズド・クレームと呼ばれ、公開されないことが多いが、著者は賠償額も含め、大部分をオープンにした。著者の姿勢から、再発防止への願いや覚悟が伝わってくる。

研修医も、指導医も、安全管理者も、トラブル回避術を羅列した安易な虎の巻に頼るのではなく、本書を読んでほしい。今夜起こるかもしれない深刻な事態と、その処方箋が記されている。「もし許されるなら、医療事故につながりそうな場面に出勤して、主治医の耳元で注意を促したいところです」。著者の偽らざる本心である。医療事故の悲しみと苦しみが生んだ、渾身の指導書である。

● A5／頁272／定価2,625円(本体2,500円＋税5%)

2012年 [ISBN978-4-260-01663-6] 医学書院刊